

東京外国語大学オープンアカデミー

## 第3回 高校生のための

グロ - バル

# 国際理解セミナー



2008年12月25日～26日

東京外国語大学 府中キャンパス 留学生日本語教育センターにて

参加した高校生が作った

## 報告書

高校生によるグローバルセミナー報告書編集委員会  
東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター

## 「<sup>グローバル</sup>高校生のための国際理解セミナー」を開催して

2008年12月25、26日、第3回の「高校生のための国際理解セミナー」が、21名の参加者を得て開催されました。中に第1回から毎回参加した人がいたことは、主催者にとって驚きでもあり、大変うれしいことでもありました。

大学が高校生を対象としたセミナーを開催する意味は、2つあります。一つは、大学における知の営みを広く社会に提供することです。大学では、多くの研究者や学生が、過去の人類の知的財産を引き継ぎながら、自然、人間、社会、歴史、芸術などあらゆる分野において知的探求を続けています。その成果は、大学に所属する学生や研究者など閉ざされた世界に留められることなく、広く社会に届けられるべきものです。これから成長し、知的探求の担い手となる高校生たちは、大学が手を伸ばすべき相手として最も重要な存在です。

第2の意味は、もう少し卑近なものですが、進路を考える高校生たちに東京外国語大学を知る機会を提供することです。この大学のことをよく知ったうえで、学ぶ意欲を持って入学する学生をひとりでも多く得ることで、大学の教育・研究をより充実させていきたいと考えています。

さて、この「高校生の国際理解セミナー」の成果はどうだったのでしょうか。それは、何よりもこの報告書の参加者の感想文に現われていると思います。高校生たちが、日頃の生活やこれまでの勉強では気づかなかったことに気づいた様子が見て取れるのではないのでしょうか。何かを真剣に考え始めた若者ほど社会にとって貴重なものではありません。こうした芽を育てていくのが大学の役割だと考えます。

高校生をこのセミナーに送り出して下さった、関係の学校や家族のみなさん、そしてセミナーの運営に協力してくれた本学学生のみなさんに感謝します。

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター長 北脇 保之

## 目 次

「高校生のための <sup>グローバル</sup> 国際理解セミナー」を開催して	1
1 プログラム	3
2 ワークショップ&レクチャー「異文化理解とコミュニケーション」	4
3 ワークショップ&レクチャー「多文化共生」	7
4 交流会	9
5 大学紹介&キャンパス・ツアー	10
6 グループ討議&発表	11
7 参加者の感想	15
8 スタッフの感想	37



# 1 プログラム

1 日 目	25日(木)	10:30~11:00	受 付
		11:00~12:00	開会式、オリエンテーション、参加者自己紹介など
		12:00~13:00	昼食・休憩
		13:00~16:30	ワークショップ&レクチャー「文化とコミュニケーション」 講師：栗田博之（東京外国語大学外国語学部教授） ファシリテーター：木下理仁（東京外国語大学国際理解教育専門員）
		16:30~17:00	1日目のふりかえり
		17:00~18:00	大学生（留学生を含む）との交流会（夕食）
		18:00~19:30	自由交流（希望者のみ）
2 日 目	26日(金)	09:00~10:00	大学紹介、キャンパス・ツアー（希望者のみ）
		10:00~12:00	ワークショップ「多文化共生」 ファシリテーター：木下理仁（東京外国語大学国際理解教育専門員）
		12:00~13:00	昼 食
		13:00~14:00	レクチャー「多文化共生」 講師：尹 慧 瑛（東京外国語大学外国語学部准教授）
		14:00~16:00	グループ討議、発表
		16:00~17:00	2日間のふりかえり、閉会式
		17:30~19:00	セミナー報告書の作成（任意参加）

## 講師等プロフィール

くり た ひろゆき  
栗田博之

東京外国語大学外国語学部総合文化講座人文系列 教授

パプアニューギニア、南部高地州、ファス族の間での現地調査に基づいた文化人類学的研究を行っている。最近の主な研究テーマは、民俗生殖理論、紛争研究、観光開発、地下資源開発等。1日目午後のレクチャーを担当。

ゆん へ よん  
尹 慧 瑛

東京外国語大学 外国語学部／多言語・多文化教育研究センター 准教授

北アイルランド紛争を通じて、暴力と和解、「社会の共有」の問題を考えた歴史・社会学者。在日コリアン3世という自身のアイデンティティを出発点として、日本の「多文化共生」についても日々さまざまな思いをめぐらせている。2日目午後のレクチャーを担当。

きのした よしひと  
木下理仁

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター 国際理解教育専門員

異文化理解、南北問題、国際協力、戦争と平和など、さまざまなテーマでワークショップを行うほか、小中学校で国際理解教育の実践に取り組む学生ボランティアへの助言もしている。ワークショップの進行を担当。

## 2 ワークショップ&レクチャー「異文化理解とコミュニケーション」

### ワークショップ

ファシリテーター：木下理仁（東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター 国際理解教育専門員）

#### ～擬似・海外旅行～

昼食の時間も終わり、メンバーのみんなとお互い打ち解けたところで、セミナー最初のワークショップが行われました。

設定は「飛行機でたまたま一緒に座った人たちと仲良くなり、しばらく一緒に旅をする」状況。所謂「搭乗券」（実際はトランプのカード）を1枚引き、同じ番号を引いた人と3～4人のグループを組み、「グループで海外旅行をしていたらこんな人に出会った」という想定で写真が配られ、「何をしていたか」「大切にしているものは何か」「将来の夢は何か」「何を私たちにくれたか」「何処の国の人たちか」など6つの質問に取り組みました。

私たちのグループが取り組んだのは、ブラジルのアマゾン川流域の少数民族の写真。ハンモックで休んでいる人々の写真を見て、いろいろなことを考えました。その結果、

- ・子供に連れられて古い家に入ってみたら、大人たちがハンモックで狩りの合間に休憩をとっているところで、私たち旅人は最高のおもてなしを受けた。
- ・自分の家族や食料、ハンモックを大切にしている、日々の生活の中で子供の出世、平和な世の中を願っている。
- ・国は東南アジアか中南米(推定)

という結論に至りました。

次に、「旅から帰ってきて、みんなで集まってお土産話をする」という想定で、他のグループの発表を聞きました。写真に関する様々な質疑応答もたくさん飛び交いました。アフリカの乾燥地帯の人々、南極のイヌイット、などなど、それぞれの暮らしぶりは違いましたが、「家族や自分の国、自分たちの文化を大切にしている」という考えはどのグループにも共通してみられました。

この取り組みで、それぞれの考えを思う存分話し合いました。ただ意見を言うだけでなく、他人の意見にもしっかり耳を傾けながらの時間はとても充実していました。学校とは違って、全然知らないメンバーばかりで上手く話し合いが進むか少し不安でしたが、みんながそれぞれの意見を持ち、伝え合うことが出来たので、思った以上に上手くいったと思います。



## ～異文化について考える～

それから、ビデオを見ました。内容は、「世界の滅亡寸前の言語とそれを話す民族について」。とても興味深い内容でした。

世界には、約 6000 種類の言語があり、そのうちの 9 割は将来のうち無くなってしまいます。この事実に私は衝撃を受けました。アイヌ語などの滅亡寸前の言語を話す人々が紹介され、彼らは「私たちが死んだらその言語はなくなってしまう」と真剣な表情で話していました。最後に、外国のマクドナルドで食事をしている人々が映されていました。世界中、どこでもいつでも同じ味を提供するマクドナルドが象徴する便利さの中に暗示されているものについて考えていかなければ、と思いました。

見終わった後、それぞれ自分の気持ちに近いものに 3 つ丸をつけ、もし合う言葉がなかったら自分で空いているマスに書くという方法で、自分の気持ちを表しました。そしてそれを元に、さっきとは違うグループで話し合いをしました。自分が話し合ったグループの人達も含め、大方の人は「おどろいた」「心配だ」「悲しい」などに丸をつけていたと思います。やがて、時間が来たときには、あまりにも議論が楽しくなって、もっと話したい！と思う程でした。

意見として、「先住民族の人々は、自分たち独自の文化を守ってばかりいるように見える。それじゃあ他の文化を受け入れられず、文化が発展しないのではないか」というようなものもありました。私自身今までなかった発想だったので、違う角度から考えるきっかけになりました。滅亡寸前の自分たちの文化を守ることだけが全てではなく、異文化との共生から更なる発展も生まれると思いました。自分たちの文化を守るのも大切ですが、他の地域の文化を受け入れることはもっと大切なのです。

## ～1 日目のワークショップを終えて～

最初にスケジュールを見ていて、面白そうなテーマだと思いました。世界の様々な文化に興味があつて、それらが今どのような状況にあるのか、これからどうしていきべきなのか、話し合ってみたい、と思っていました。しかし、今では、その独自の文化を維持することすら困難な状況にある、という事実を知り、むしろショックの方が大きかったです。異文化に対して柔軟な心を持ち、先入観を持たずに向き合うことが理解の第一歩だということ学びました。

とても実り多く、充実したワークショップでした。

(佐藤早月)

## レクチャー

講師：栗田博之先生（東京外国語大学 外国語学部総合文化講座人文系列 教授）

少し難しかったですが、本当に面白くて、ひきこまれてしまうようなお話でした。大学の先生ってすごいなあ！と思ってしまいます。

先生の専門にもなっているパプアニューギニアを例として、主に、**パプアニューギニアの伝統（文化・言語など）と近代化** についてでした。

まず、現地の人々の生活について、写真をたくさん用いて説明して頂きました。今、こんな自分たちとは大分違う生活をしている人たちがいるというのを具体的に知らなかったのが狩りの仕方やお祭りのお話の一つ一つがとても面白かったです。

### ニューギニアの伝統と近代化の共存のあり方を考える

伝統・文化：ずっとそこにいた人達がつくってきたもの、先住民のもの

しかし…

ニューギニアはオーストラリアの植民地であったがほとんど入植していないため今でも先住民が大半…「先住民」という概念がない

- ・他の地域と平和な関わりを持ち近代的な役に立つものを手に入れたい
- ・国家を保ちたい
- ・学校教育、近代医療、電気がほしい

↓

共通語作ることが大切

↓

共通語であるピジン語・英語によって 600 ある民族の言葉は失われていく

↓

伝統的な知識や文化が言語と共になくなっていく

生活の中で伝統を残していくのは難しいことが分かりました。今まで伝統は無条件に守るのが良いことだと思っていましたが、むしろ時代のニーズに応じて上手く変えていくことが大切なのだと思います。しかし、その文化の取捨選択にあたっては、誰が判断するのか、どのようにして先入観なしに個人にとって良い方を選ぶことができるか、など課題が多くあります。今絶滅の危機が叫ばれているのは、少数民族の言語だからです。

(鶴見令奈)



### 3 ワークショップ&レクチャー「多文化共生」

#### ワークショップ

ファシリテーター：木下理仁（東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター 国際理解教育専門員）

「生きるために必要なものはなにか、思いつくものをどんどん出して書いてみてください」

思いつくものを否定せずにどんどん出して書いていくブレインストームのやり方で、私たちはそれぞれに頭に浮かんだものを書いていきました。考える時間をしばらくとった後、1人1個ずつ発表して、ボードに書き出していきました。ボードが目一杯になるほど出てきたさまざまな言葉には「空気」「愛」「知識」などなど、中には私が思いつかなかった「失敗」や「死」などもありました。

次に、親の転勤や国際結婚のために日本に来た中国人の子供たちを中心にしたビデオを鑑賞しました。そのビデオを見て私は言葉をはじめとした、日本人と中国人の友達同士のコミュニケーションの問題や、国際結婚の家族にある大きな壁などを感じました。それから、どうしたらそのような問題は解決できるかを7人ほどのグループに大学生を交えて討論を行いました。



私たちのグループでは、国際結婚の家庭について、父親と子に壁がある場合には母親があいだに立って仲介者となり、コミュニケーションをとればいいんじゃないかという意見がありました。また、言葉の通じにくい日本人と中国人の子供たちについては、相手が外人だからと距離をとらないで一歩寄ってみる、という意見が出ました。そして双方の例に共通していえることは、わかり合うためにはまず自分を相手にさらけ出すことが大事、相手をわかろうとする姿勢をもつだけでも何かが変わるんじゃないか、ということでした。



他のグループで話し合った内容などを聞いて私を感じたことは、言葉の壁はとても大きなもののように感じるけれど、はじめに乗り越えなければならぬ壁とはまずお互いが歩み寄ろうとすることだと思いました。そうして乗り越えてから、相手の言葉を理解するという壁に向かうのだと思うのです。

多文化共生についてぼんやりとしていたイメージが晴れていくような、そんな気のするワークショップでした。

(八十 碧)

## レクチャー

講師：尹 慧 瑛（東京外国語大学 外国語学部／多言語・多文化教育研究センター 准教授）

題名が多文化共生。いったい共生ってどういう事なのか、言葉では簡単に言い表せるが考えてみれば底なし沼のよう、これを尹さんは自身の体験・思いを胸にレクチャーをおこなった。在日コリアン、見た目では分からないが、日本と朝鮮半島との関係、拉致問題、など様々な問題が介在している中で、考えている事がみんなと違うと言う。

大切なものは名前で、自分を一生支えるもの。自身は朝鮮の名前をなのっているが、中には朝鮮名と日本名を持っている方もいて、二つの名前があることが“心が引き裂かれる”“どちらかの名前がでていない”などの葛藤を起こしているという。

在日コリアンは、日本の法律上で特別永住者という扱いになっていて、パスポートはもちろん大韓民国のもの。特別永住者に日本の選挙権はなく、日本社会の一役を担えない違和感、日本に対する思いは様々だが、矛盾はないそうだ。

小学校、中学高校と日本の教育で育つ中で沢山の体験をされたが、当時は差別と感じていなかったものも、今考えると差別だったのではと思うことがあるそうだ。その差別を、“いけない事”“これではもう済まなく、どんな問題なのか全否定するのではなく背後には何が介在しているのか、これらを差別として働かせないためには何が出来るのか。

ここまで考える必要がある。

大学の朝鮮語学科、家でしか話していない朝鮮語が試験としてでてくる、母国語を外国語として学んでいく過程で自身の境界が変化していった。まわりの友達が韓国に短期留学していく中で、韓国通になっていったが自身としては韓国も北朝鮮も一つの朝鮮半島であり、分けて考えている日本社会は居心地が良くない。

初めて韓国に渡航したとき、“帰る”という感情はなかったという。ソウルには親近感を持ち、街を歩くと同胞がいる。だが韓国は外国である。日本も外国であり自分の居場所はどこなのだろうか？幸いこれらの事を考える職業に就き、これからも考え続けていく尹さん。今回のレクチャーのまとめとして

日本人とは何か？・・・捕えなおす必要がある  
多様化、多様性・・・どのように説明すれば良いのか

沢山の人間がいるなかで異なった考え、思い、志を持った者同士がお互いにぶつけ合い、両方の気持ちを向き合って共有していく事が大切であると感じた。



（柳川陽介）

## 4 交流会

1日目終了後、参加者と大学生や留学生の方々と交流を深めつつ夕食を食べました。

大学では中学校や高校とは違って、自分の興味のある専門的な勉強ができるだけでなく、スポーツなどの部活動やアルバイトなど充実した日々を送れるということなどをお話していただきました。

また、留学生の方にそれぞれの国の文化や日本とその国の違いなどを教えてくださって新たな発見ができました。

食事終了後、自由交流の時間に大学生の方々がペットボトルでクリスマスツリーを作ろうという企画をしてくれました。

飾りを作るのとペットボトルでツリーを作る2グループに分かれて製作しました。

私は飾りを作るほうを担当しました。その中で中国からの留学生の梁さんとお話しました。外見が同じような中国人と日本人。でも文化の違いを梁さんからたくさん学ぶことができました。

また、韓国からの留学生の朴さんに民族楽器を演奏していただきました。想像していたものより、迫力があってすばらしいものでした。

この交流会をきっかけにさまざまな異文化に触れることができ、自分にとってとてもいい刺激になりました。また、これから私生活で外国人の方と触れ合う機会があるとき、自分はどうすべきなのかなど考えるきっかけになりました。

交流会を企画していただいた大学生やスタッフの皆さん、ありがとうございました。

(藤原美沙妃)



## 5 大学紹介 & キャンパス・ツアー

2日目の朝、セミナー参加者のうち希望者のみですが東京外国語大学のキャンパスツアーを行いました。北風が強い中朝早くからたくさんの参加者が集まり、大学生の案内のもとに構内を見学しました。



私が来校した東京外国語大学府中キャンパスは2000年に出来たばかり。校舎も綺麗でした。

最初に案内していただいたのは食堂。3種類の食堂があると聞いたときは驚きました。

そして次に案内していただいたのは、図書館。多数の言語の本がそろっているなど、東京外語大ならではの図書館だったと思います。

そして次に案内していただいたのは体育館とグラウンド。中には入りませんが、体育館の中にはシャワー室もあるそうです。東京外語大の1年生たちは体育が必修だそうです。高校と大きく違うので、何度も感激しました。

大学生の方々はたびたび東京外語大クイズをしてくださるなど、私たち参加者を楽しませてくれました。その後も留学生が宿泊している寮やロシア語専攻している方が植えた赤カブなどを見せていただき、とても楽しい1時間になりました。



私は今まで大学生の方々と触れる機会があまりなかったのですが、このキャンパスツアーでさらに交流が深められたのをうれしく思います。大学生活についても色々教えていただいたのでこれから大学の道を進むときにとっても参考になりました。オープンキャンパスなど東京外語大に行く機会があったら行きたいなと思いました。

大学生の皆さん、ありがとうございました。

(藤原美沙妃)

## 6 グループ討議 & 発表

セミナー1日目から、教室のホワイトボードに『みんなと話してみたいこと』というタイトルの書かれた大きな紙が貼ってあった。あいている時間に、それぞれが自分の疑問や話してみたいことを書き込んでいき、「外国の文化を理解しあうには」「なぜ戦争はなくなるのか」「なにをもって豊かといえるか」「国家とアイデンティティの関係」など、様々な角度・視点から、たくさんのキーワードが書きこまれた。2日目の午後、それらの疑問を分類し、「文化・価値観の相互理解」「戦争・暴力」「幸せ・豊かさ」「国家とアイデンティティ」という4つのグループに分かれて話し合った。

各グループは、それぞれのテーマに沿って議論をめぐらせた。例えば「文化・価値観の相互理解」グループでは、はじめに1人ずつ自分の意見を言い、そのあと、お互いの意見に対してどう思うかを言ったり、考えたりした。様々な観点から出された意見をテーマに結びつけ、検証していくのは難しいことではあったが、図などを用いてまとめていき、「価値観が文化をつくり出している。」ということに気づいた。しかし、考えても考えても『結論』は導きだせず、「こうやってモヤモヤしながら、これからも考えていくことが必要だ。」というかたちで議論はまとまった。このように、各グループが議論してまとめたものを発表し、それぞれの考えを知った。

「戦争・暴力」グループは、「人々が世界各国に1人ずつ友達をもったら、戦争は起こらなくなるのではないか。」という考えを発表していた。「幸せ・豊かさ」グループは、『『幸せ』のベースになるのは『健康であること』だと思うが、『健康』の基準は人それぞれ違う。』と言っていた。「国家とアイデンティティ」グループは、「ある国の一部や1人を見ただけで、その国のことを判断してはいけない。」という意見を述べていた。

グループ討議では、自分の興味ある分野について、仲間と意見交換をしたり、問題解決のために必要なことを考えたりと、とても貴重な経験をすることができた。また、「これだ！」という結論に辿りつくのではなく、「これからもこのテーマに対して問題意識を持ちつづけ、考えていかなければならない。」という、一番大切なことに気づくこともできた。

(田口結子)



## 「文化・価値観・相互理解」グループ

まず私たちは、文化・価値観とは何か、考えていたこと、経験を話していきました。例えば日本人は他人の気持ちになって物事を考えて、相手の気持ちを悟ろうとする特徴があると思うが、ヨーロッパ人は自分を一番に考え、また悟るという習慣が無いように感じたことがある、という話が出ました。

そのなかで、考え方や価値観は一人一人異なっても良いはずなのに、周りの人やその場の雰囲気合わせる、ということが少なからずあるのではないか、という疑問がでました。

なぜ周りに合わせるという動きが出てくるのか、原因を考えました。本当に理解し合うには時間がかかるため表面的にまとまろうという動きがあるからではないか、ということが挙がりました。一方、本当に理解し合うことが、価値観の共有や、相互理解になるのではないか、ということから、価値観共有・相互理解とは何かを「芋虫」を例えに図式化して考えていきました。

『芋虫を見たときに、芋虫を食べる文化のある外国人は「おいしそう」と思っても、日本人は食べ物の対象とは見ないのではないか。そこでその外国人と日本人の間で「食べない文化なのだ」、「食べる文化なのだ」とお互いを受け入れることが相互理解ではないか。

しかし、日本人で芋虫を食べる人がいた場合、どのように感じるだろうと考えると、「その日本人も食べる習慣があるのだ」、とすんなり受け入れられないのではないか。では先の例えと、この例えとの違いはなんだろうと考えると、日本人とは～である、日本人イコール自分というように考えてしまっているからではないか、』という考えが出てきました。

グループ討議を通して、価値観が文化をつくっているのではないか、外国人・日本人・ヨーロッパ人とくくって考えたがそれは適当であったのかどうか、区別と差別とは、などが出ました。

特に、物事を一方的に見るのではなく、右からも左からも、更に上から見渡してみることが価値観共有に大切だということ、また既成概念に囚われず、新たな概念を受け入れる柔軟性を持つこと、話を聞こうという姿勢でいることが相互理解になるということ、今回の議題のように大きな課題については、簡単に答えは出ない、このモヤモヤを考え続けていくことが必要だ、ということが私たちの成果でした。

(宮崎友花)

## 「幸せ・豊かさ」グループ

私たちのグループは「幸せ・豊かさ」をテーマに討議・発表を行いました。

討議では、まず、「幸せ・豊かさ」という言葉から思い浮かぶ言葉を次々と出し合っていくワークショップでも行ったブレイン・ストーミングの作業をしました。そこで出たものの一部を挙げると、家族、安心・安全、教育、希望・夢、友達、自然、平和、お金、食事、思想・宗教の自由、寝る時間、誰かに必要とされること、知己、家、心の余裕（・・・があること）などです。これらのものを「お金が必要か必要でないか」という観点で分けていくと、各々の環境や考え方でその区切りは全く違うものになることが分かってきました。

また、「お金があれば幸せなのか」という問いに対して、「お金の豊かさを幸せと考える人はお金は上限がないのでいつまでも満足感を得られないが、心の豊かさを幸せと考える人は目標を達成した時点で満足感を得られるのではないか。」という意見も出ました。

さらに、ブレイン・ストーミングの作業から発展して、「色々幸せに必要なことはあるけど、”生きていくこと”がそのベースであり、何よりも大事なのではないか。」という意見と、それに対して「植物状態の方など、生きていても辛い状況にある人もいる。」という意見が出、それでは”（精神的にも肉体的にも）健康であること”がまずベースでその上にそれぞれの状況に応じた”幸せの条件”がありそれが満たされた時に「幸せだ」と感じられるのではないか、という仮定にたどり着きました。

時間の問題からこれより深くは話し合うことは出来なかったのですが、以上のことを元にして発表準備へ移りました。「結論よりも考えたプロセスを発表してほしい」という木下さんのお話を心にとめつつ、結論にはたどり着いていないけれどなるべく分かりやすく説明しようと、みんなで模造紙にまとめていきました。初めのブレイン・ストーミングの結果は「日本だと・・・」という条件でベン図にしてまとめました。また、その他のこともグラフや大きい文字で書いていきました。

発表では、多くの人から質問を投げかけられ大変な面もありましたが、私たちが伝えたかった、「この発表を考える機会にしてほしい」ということは伝わったのではないかと思います。

木下さんの講評によると「幸せとは？」というのは永遠の問いであるそうです。私自身、中学生の時に同じテーマで2泊3日の話し合いを行いました但那時は今回出たのとは全く異なる答えになりました。人生を通して考えていくべき問いに出会えたことに感謝しています。

(大津璃紗)

## 「戦争と暴力」グループ

私たちのグループでは、「戦争と暴力」について話し合いました。(実際にテーマとして扱ったのは「戦争」だけでしたが)

私たちはひたすらいろいろな観点から戦争についての意見を出していったので、その中の一部を紹介したいと思います。

戦争がなければ平和であるというわけではない(例えば、日本は戦争はしていないけれど自殺が多いから平和だとはいえない)のではないかと。戦争に使う武器などをつくったり売ったりすることによって利益を得る人もいるし、戦争を仕事にしている(戦争がなくなったら仕事がない)人たちもたくさんいるから戦争はなくなる。少年兵のように幼い頃から人を殺すことだけを教えられて、戦うことしかできず、社会に出た時にできることがない人たちや、宗教関係などで戦争をしている人たちの中では、もし仮に戦争がいったんなくなったとしてもまた出てきてしまい、結局なくなるのではないかと。

本来は国民のために国があるはずなのに、国が国民を苦しめるような状況になってしまっている(国に留まったり国の崩壊を防いだりするために国民が苦勞している)、それで国が戦争をすれば言ったら国民が必然的に戦いに行かなくてはいけなくなっているのでは、というような意見がたくさん出ました。

それぞれが本やテレビから得た知恵や知識、個人の持っているものを出し合いながら生まれた考えや対策はまだ十分ではなく、最後まで結論に達することはできませんでしたが、短い時間の中で私たちが出したことをこれから土台にして知識を増やしつつ、このテーマについて考えていきたいと思っています。

今回私たちの中に入っているいろいろな指導、アドバイスし、楽しい時間を作り出してくださった大学生やスタッフの皆さん、本当にありがとうございました。

(原田愛弓)

## 「アイデンティティと国家」グループ

私たちのグループでは一貫して「アイデンティティとは何か」という問いを意見交換しながら考えた。

- ・「私は～です。」の内容
  - ・自身を社会の中で位置づけるもの
  - ・例えば在日韓国・朝鮮人で便宜上日本名を名乗っている人が、その国での名前を名乗ること
- 自分のルーツ

必ずしも「アイデンティティ」に国籍は必要ではない

外国人への固定概念や偏見

国家という集団では個人が見えない

国家の出来事とその国民への価値観の変化に必ずしも繋がるわけではない

…「アイデンティティ」は口にする以上に様々な面を持っていて、一つの答えを導けそうにない。だがメンバーの一人ひとりが考える「アイデンティティ」の意味を話し合うと、辞書で知る以上に生き生きとした意味が含まれているように感じた。

最終的には「アイデンティティ」とは個人の構成要素である」とまとめた。まだはっきりとした結論は出せないが、初めて悩んで話して模索するという問題の考え方を知り、実践できた。学校では答えばかり要求され、問題を問題のまま扱うという事はしたことがなかった。グループ討議では新しい問題追究の方法を知ることができた。

(松島周子)

## 7 参加者の感想



多言語・多文化教育研究センターの北脇保之先生から修了証書の授与

朝倉 綾乃	東京都	高校2年生	中村 夏子	神奈川県	高校2年生
大津 璃紗	神奈川県	高校2年生	原 愛実	山梨県	高校1年生
神杉 美早	埼玉県	高校1年生	原田 愛弓	山梨県	高校2年生
橘川 浩佳	神奈川県	高校2年生	平石 渚	神奈川県	高校2年生
小坂 知子	東京都	高校1年生	藤原 美沙妃	東京都	高校1年生
佐久間 なつ紀	山梨県	高校1年生	松島 周子	埼玉県	高校2年生
佐藤 早月	東京都	高校2年生	松本 信	神奈川県	高校1年生
鈴木 夏奈	神奈川県	高校2年生	宮崎 友花	埼玉県	高校2年生
田口 結子	東京都	高校1年生	八十 碧	埼玉県	高校2年生
円谷 英里	神奈川県	高校2年生	柳川 陽介	神奈川県	高校2年生
鶴見 令奈	神奈川県	高校1年生			

## セミナーに参加して

朝倉 綾乃

このセミナーに参加し、本当によかったと思っています。学校では、日々のテストや受験に向けての勉強で暗記することばかりに脳を働かせていますが、このセミナーでは考えるということに脳をフル稼働させた気がします。自分の興味のある問題について考えることは、とても楽しかったです。また、自分と同世代の子と意見交換をしあったり、先生によるレクチャーのおかげで、さらに考えを深めることができました。二日間非常に充実した時間を送ることができました。

そして大学生のボランティアの方々のおかげで、リラックスした気持で学ぶことができました。優しく親切にサポートして下さい、本当に感謝しています。

このセミナーを通し、将来自分のやりたいことの方角性を再確認することもできました。そのやりたいことを実現するために、今やるべきことをしっかりやろう、という気持ちにもなりました。

「たくさんのことを学べて、よかったな。」で終わりにせず、学んだことをよく噛み砕いて、自分のものとして吸収し、今後に活かしていきたいと思います。機会があればまた参加したいなと思います。

## 国際理解セミナーに参加して

大津 璃紗

今回二日間このセミナーに参加させて頂いて、色々な経験をすることができました。

私がこのセミナーに参加した理由は、将来世界の子供たちの為に働きたいと思っているからです。今まで色々調べたり、本を読んだりしてきましたが、高校生の為の参加型のセミナーやボランティアはなかなか無く、何か動いてみたい！と思っていた私にとってこのセミナーはぴったりだと思いました。

実際参加してみると、初めは打ち解けられるか不安だったみんなとも学年関係なしにすぐに仲良くなれ、また、今まであまり気にとめてこなかった諸問題に多く気づくことができました。私は今まで、開発や貧困・戦争などの問題に対しては自分でも調べたりしていたし、学校でもNGOの方や大学の講師の方からお話を伺う機会も多く、問題意識も多少なりとも持ってきました。しかし、今回のセミナーで取り扱った「文化とコミュニケーション」「多文化共生」というテーマはそれまでの私があまり考えてこなかった事であり、その問題の深さに衝撃をうけました。例えば、言語1つをとってもそこから伝統、発展、コミュニケーションなど様々な問題に派生していきます。しかも、この様な問題は答えを求めるのが大変難しく、何が良くて何が悪いのか少しの期間で分かるものではありませんでした。でも、だからこそ考えていかなければならない問題なのだと思います。

今回、大学の授業のような講演を聞いて、ますます大学に行きたいという思いが強くなりました。私が知らない問題はまだまだあると思うし、その解決のプロセスを考える基礎をもっと教わりたいと思っています。

このような貴重な機会を下さった外語大の方々に感謝したいと思います。どうもありがとうございました！

## 感 想

神杉 美早

始めは色んな意味でとても不安でしたが、  
大学生や外大で知り合った友達の優しい言葉に触れて  
この2日間とても楽しく過ごすことができました。

普段の高校の授業などでは触れないこと、  
大学の講義などを外語大で受けたことは私の今後の糧になると思います。  
グループ討議ではなかなか思い付かなくて意見をバンバン出すことは  
出来ませんでした。みんなの意見をたくさん聞いて「なるほど!」と  
思ったことが多々ありました。

今後、この経験を生かして色々なことについて考えてみたいと思います。  
2日間という短い間でしたが、ありがとうございました。

「伝統のあり方とはどういうものなのだろう？世界各国のすべての人々がお互い何も弊害がなく理解し合える世界ってどのように作りだすことが出来るのだろうか？」

私はこの国際セミナーに参加して、新たにこのような疑問を抱きました。今までの私は、ただただ伝統とは人々が創り出した歴史であり、周りの環境がどんどん変化していこうと守っていくべきものだと思っていました。この考えはただの理想にすぎなかったことを栗田教授のお話を聞いて思いしらされました。私は近代化の波に流されず、弓や矢を持って狩りをしたり、自分たちで家を作ったりと、自分たちのちからだけで生活をしていると思っていた先住民族も今は、どんどん時代の流れとともにごく一般的な生活になろうとしているということを聞き、私はびっくりしました。そして最後に教授が「近代と伝統の共存など夢物語だ。」とおっしゃった時に私の中ですごい衝撃が走りました。というのも、教授のお話を聞く前に、先住民のビデオをみたり、みんなとディスカッションをするたびに私は「先住民の伝統ある生活を守ってあげられず、ただ私は見ているだけでとても悔しい。」と発言していました。しかしこの考えは、先住民の人たちも近代技術を利用してより住みやすい環境をつくりたいということもあるという考えを知らなかったからゆえに、ただ伝統を守るということは良い行いだという教えをもとにしたものであって、中身がないものだと私は思いました。今までの考えが覆されて、私にはまだまだ知らない世界があるんだ、と思ったと同時にもっとこのことについて追求していきたいと思いました。

そして、今回このセミナーに参加してとてもためになったと思ったことは同じ高校生の子達とのディスカッションです。高校ではこのような機会を得ることが出来ず、意見をぶつけ合うという刺激的なことは小学校でゴミ問題について喧嘩腰しになって話し合っただけで済ませていました。やはり高校生ともなるとみんな自分の意見をじっくり考えながら話すので、私が思いもしていなかった痛いところをつく発言も度々あり、本当に刺激になりました。そして最後にテーマ別に分かれて話し合ったグループディスカッションではとても多くのことを学べたと思います。私は文化の価値観と相互理解というテーマにそって話し合いを進めていったのですが、みんなの口から出る様々な考えに圧倒されて、度々言葉をつまらせてしまうこともありました。でも、話し合うことにより、新たな発見をいっぱいすることが出来てとても考えさせられました。テーマについての答えを生み出すことは出来ませんでした。しかし、みんなで話し合えばあうほど、様々な意見が出てきて、ひとつのテーマをいろいろな角度から見ていくことにより本当に多くの疑問が生まれました。こういう場合もあるんじゃないか？いや、もしかしたらあんなこともある。といったみんなで話しあわなければ生み出されない考えが驚くほど多くでてきました。そして、上手く自分の考えを相手に伝える難しさも学びました。私の発言にみんなが「あー！」たしかに！」と反応してくれたときは本当に嬉しかったです。

ありふれた言葉ですが、私は今回このセミナーに参加して本当によかったと思いました。共通の興味を持った同士で集まり、自分の持つ意見をみんな本当に積極的に発言する。そして専門家の話を聞いて刺激を受け、考えが広がり、より現実的なものになる。そしてその考えをまたディスカッションでぶつけ合う。こんな最高の環境は普段味わうことは出来ないでしょう！！たった二日間でしたが、本当に意味深く、世界の見方が変わった日となりました。今回抱いた新たな疑問をこれからも追求していきたいと思います。

橋川 浩臣

## 国際理解セミナーを終えて

小坂 知子

私は引っ越しは割と何度かしているものの、常に本州内だ。旅行も海外へ行かない。それでも、出会うのは日本人だけというのは有り得ない。

小学校の時に、近所で夏休みに来ていたフランスの女の子がいた。仲良くは遊んだが、言葉が時々通じなくなることに恐怖を感じた。同時期、バイリンガルのハーフの友達がいた。英語を忘れてしまうから、と英会話スクールに通う彼女は遠い人に見えた。日本人の私って何、と初めて考えたのは、多分その頃だ。幼い私は分からなかった。今もちろん分からない。数学みたいな答えが出ればいいのに、と思うことが今の私には多すぎる気がする。

東京外国語大学で行われた国際理解セミナーに私は参加させて頂いた。

クリスマス。二十五日。文化とコミュニケーションについて。

二日目。二十六日。多文化共生について。

2日間を通して感じたのは、人によってある事に対するアプローチの仕方は別でも根源は同じなんだということだ。伝統は、医療は、先住民は、信仰は、日本人は、国籍は。ワークショップやレクチャーではたくさんの単語や問いが飛び交う。人々が望むのは、きっと幸せに暮らしてえということだけなのに、なんでこんなに複雑なのかとも思う。このセミナーに参加している人たちも、きっと根源には幸せに暮らしてえと思っているはずだ(と私は思う)。それでもきっと、それぞれに別の生活があって、全く違う価値観を持っていて、欲しい物や必要としている物はバラバラだ。それを感じるだけでも意義があったと思う。また、大学の教授や准教授の方からのレクチャーは、ぼんやりとしていたものに対する問いや糸口が見えてきた。

数学のような答えは出てこないが、数学だって公式はあっても未だに証明できないものなんてざらにある。それでも  $1+1$  の答えは変わらない。幸せってこととかももしかしたらそういうものなのかもなとセミナーの後に私は思った。

最後になってしまいましたが、2日間にお世話になりました教授や職員、大学生の方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

## 私にとってのグローバルセミナー

佐久間なつ紀

2日間のグローバルセミナーを終えた今、このセミナーに参加できたことをとても嬉しく思っています。

国際理解 多文化共生 アイデンティティ…

高校受験以来触れていなかった言葉がこのグローバルセミナーにはあふれていました。私にとってこれらの言葉は新聞や国語の問題文に出てくる言葉であり、どれも実生活での具体性を持っていませんでした。これには、今まで関わった外国人は西洋系のALTと後輩の韓国人だけという私の生活が関係しているのかもしれませんが。

山梨で普通に暮らしている私には、文化の違いに戸惑った経験もなければ、そのことが元でトラブルになった経験もありません。

そのためか先に挙げたような言葉があらわすことについて真剣に考えたことも無ければ、考える必要もありませんでした。しかし、実際は違ったのです。

このことに気づかせてくれたのがユンヘヨン先生のレクチャーでした。私が初めて先生を見た時、美人な日本人だと思いました。でも実際は美人な韓国国籍の在日コリアン3世ということでした。今まで「外国人＝見れば分かる」というイメージがあった私にとってこれは衝撃でした。山梨に住む外国人は17,061人でそのほとんどがアジア系の国籍をもった人たちです。つまり、私の周りにもユン先生のように見た目は日本顔の韓国人や中国人がいるかもしれないのです。もしそうだったら、私の国際理解への考えの不十分さがその外国人を苦しめることになるかもしれません。そう気付いた瞬間に、これまで今考える必要はないと思ってきた言葉達が、とても重要で、今すぐ考えなければならない言葉に変化したのでした。

これから私は、グローバルセミナーで得たヒントをもとに、この言葉達について考えていきたいと思っています。

グローバルセミナーに参加した2日間は驚くほど充実していました。今まで考えたこともなかった問題を、セミナーに参加した仲間と共に真剣に考え、話し合いました。考え、発言し答えが返ってくる。この充実感は、今まで感じたことがありませんでした。そして、考え、発言することの大切さを、経験を通して学べたことは私の財産でもあります。

## 2日間を通して得たもの

佐藤 早月

私は、海外に住んでいた経験があり、「国際理解」にはずっと興味を持っていました。地球儀を眺めたり、海外経験をした様々な人のエッセイを読んだりして、外国の様子や文化を思い浮かべるのがとても好きでした。だからこのセミナーの参加が決まった時は、純粋に嬉しかったです。

ですが、甘かったです。私は世界を理解していると、すっかり思い込んでいました。どんどん入ってくる新たな知識、かつ非常に難解なテーマ。しかも様々な視点から、社会や世界を見た、高校の現代社会の授業ですら触れなかった内容。数学よりも古典よりも物理よりも難しいじゃないか!!!自分はもちろん意見を言えるのか、ものすごく不安になりました。

けれど、時間が経つにつれて、それは全くの杞憂であることが分かってきました。木下さんをはじめとする、とても気さくなスタッフの方々や、自分と同じ価値観を持つメンバーとも出会い、気がついたら私はいろいろなことを発言していました。自分でもびっくりしました。

中でも、最後のグループ討論は、特に印象に残りました。私のグループは、「文化と価値観」をテーマとし、芋虫を例とした、「それを普通に食べる外国人」と「食べない日本人」との反応の違いと、その違いを日本人がいかに受け入れるべきかを話し合い、模造紙に表しました。はっきりとした結論には至りませんでした。ずっと話し合ってみたかった内容が話し合えたので本当に良かったです。「国際理解」には、はっきりとした答えはなく、常に考え続けるべきであることを学びました。

この2日間は本当に、本当に、充実していました。セミナーの全てが終わった今、私はこの企画に関わった方全て、参加したメンバーのみんな、そしてこの企画そのものに対して、感謝の気持ちでいっぱいです。学校では、クラスや部活など、話し合いの場はあっても、多数意見の一方的な自己主張に片寄りがちで、私自身、意見を伝えようとしても理解されていないと感じることも多いのが事実です。反論されることで場違いな意見を言ってしまうこともあり、今まで積極的に話すことは避けてしまっていました。しかし、みんなの意見に耳を傾けているうちに、自然に意見を述べている自分がいました。心を開いて話し合いに参加することで、お互いが理解できる喜びを味わいました。これからも、今回の経験を生かしてもっと積極的に発言したいと思います。

今回のセミナーで、「国際理解」に対して新しい見方を得ることができました。本当にありがとうございました。

## グローバルセミナーに参加しての感想

鈴木 夏奈

今回初めて大学のセミナーというものに参加してみて、普段学校では話し合わないようなことまでみんなと語り合うことができたと思います。全く初めて会ったばかりの同世代の人たちと色々な話題について意見をぶつけ合ってみて、普段はあれほどまでにちゃんと人の意見を聞くことがなかったので、自分が全く考えもしなかった考えがいっぱいありました。

中でも、「言語」について。世界にはものすごい数の言語があり、しかもどんどんその言語が減ってきているという現状。なぜ減ってきているのだろうか？など、たくさんの疑問が浮かびました。

もう1つは最後にグループごとに分かれての発表。私は、「幸せと豊かさ」について考えましたが、結論はでませんでした。考えてみれば、結論なんてでないのです。なぜなら人はそれぞれ違う考えがあるから。無理に1つの答えをだす必要なんてないのだと思いました。考えれば考えるほど、疑問や別の考えがでてきます。

今回のセミナーでは、常に「なぜ？」と考えさせられる場面がとてもキーワードになっていたと思います。何事も考えなければ、始まりません。そして、たくさんの違った意見を聞くことはとても大切なことだと思いました。

また、大学教授のお話を聞いて、自分が今まで知らなかった世界について知ることができました。親の関係で日本にきてまだなじめない子供。最初は本人の気持ち次第でなんとかなると思ったけれども、そうはいかない部分もあったりする。

たった2日間だったけれども、今までで1番考えて、話して、聞いたセミナーだったと思います。大学生に大学生活についても色々聞くことができ、中国・ロシアから来た留学生からはそれぞれの国について聞くことができ、本当に中身の濃いものになりました。こんないろんな体験ができたことにとても満足しています。

あとは、ご飯もとってもおいしかったです。

そしてなにより、みんなで作ったペットボトルX'mas ツリーは今までで1番のツリーだと思います。楽しい2日間をありがとうございました。

## 高校生のための国際理解セミナーに参加して

田口結子

長い間、『国際』というテーマに興味をもってきた私にとって、このセミナーに参加したことはとても良い経験になった。普段の生活のなかでは学べないことを、2日間のセミナーで思いきり吸収することができたと思う。

『文化とコミュニケーション』や『多文化共生』というテーマでワークショップやレクチャーが行われ、大学の先生のお話を聞いたり、同世代の皆さんと話し合ったりした。『国際理解』というものを様々な角度から考えることができ、それまで見えてこなかったことや漠然と考えていたことが、次々と具体的なかたちで見えてくる感じがした。

今まで私は、『国際理解』というと、「外国の人と出会い、お互いの言語や文化を理解して、仲良くする・・・」というような、甘い考えをもっていた。しかし今回のセミナーに参加して、『国際理解』の実現には、歴史や価値観のちがいなど、いくつもの難しい問題を越えなければいけないということを知り、言語の習得や文化を学ぶなどといった華やかな部分だけでは、真の『国際理解』には辿りつけないのだと知った。

2日目のグループ討議では、『文化・価値観と相互理解』というテーマのもと、同じような分野に興味をもつ仲間たちと議論した。様々な視点から出る意見を聞き、私は、「価値観が文化をつくり出している。」という言葉が導き出すことができた。グループの仲間から共感を得ることもでき、嬉しかった。グループ討議では、『結論』に辿りつくことはできなかったが、それはむしろ良いことで、「これからも考え続けていこう。」という前向きな思いが生まれた。「結論が出ないということも、間違いではない」。はじめて、そう思えた。

2日間は、新鮮な体験の連続で、とても充実していた。『国際理解』という大きなテーマを考える、切り口が開けたと思う。これからもこのセミナーで学んだことを忘れずに、『国際理解』というテーマに向き合っていきたい。

## 感想文

初対面の人とワークショップ、そしてレクチャー。一学年八十名弱という小規模な学校で約5年間学んできた私は、行く前からかなり緊張しました。しかし、21人は同じ目的で集まってきたので、お互いに話そうとしていました。だから、ワークショップでは「自分の意見をきちんと相手に伝え、相手の意見もしっかり聞く」ということが自然に成り立っていったように思います。また、21人でブレインストーミングをやった時などに、自分とは異なる斬新な意見がでて、インスピレーションをたくさんもらいました。レクチャーでは、世界には複雑でなかなか解決の糸口が見つからない問題もあることを認識させられました。特にグローバル化が進む世界の問題の1つである地域特有の文化の破壊について、先進国で近代的な日本に暮らす一人の人として何ができるか、ということを考える良いきっかけになりました。また、何について考えるとしても「様々な」見方や考え方があり、正解は決して1つにはならない、ということを感じてはいけないと強く感じました。最後にプレゼンテーションをした後に、そのユツまで教えて頂き、本当に「濃い」2日間でした。この2日間の経験を生かして、これから先進んでいきたいと思っています。

ユウヤ エリ  
岡谷英里

## 問題の発見

鶴見 令奈

私は今まで、高校生だけが集まるような国際理解セミナーには参加したことがなかったので、同じような立場の友達と話し合い、気兼ねなく突っ込んで聞くことができ、とても充実感がありました。私はいつも積極的に意見を言う方ではないのですが、皆が真剣に聞いてくれるのでとても心強い感じがしました。他の人の意見になるほどと思ったり、新しい考えが生まれたり、自分の意見を受けて話が広がったり…。意見を口に出したり新しく聞いたりすることで、考えに動きが出てきました。ディスカッションを、楽しい！と感ずることができました。新鮮でした。

最後のグループディスカッションは題が大きすぎて大変でした。私が入ったグループも「戦争と暴力」で、何から話しあつてよいのか分からず、スタッフさんに助けていただいて「戦争はなぜ起こるか」から始めることになりました。絞った題の方が話し合いはしやすかったかな、と思います。でも他のグループの発表を聞くと、私が言葉から受けるイメージとは少し違う方向に話が展開していて、本当に色々な問題につながっているなあ、と感ずます。

また、このディスカッションでは、どのグループも最終的なしっかりした答えは出せていませんでした。それは当たり前のことですが、他の人の意見や発表を聞いて、考えなければいけない問題を、たくさんみつけることができました。

レクチャーもとても興味深く面白いお話でした。レクチャーでは具体的に、問題をどのように扱ったらよいのか考えていました。そこでは1つの具体的な題に対して本当にたくさんの問題を見出せました。このように、ずっと考えていくべき問題をたくさんみつけられたことが、このセミナーでの一番の収穫です。次につなげて、考えていきます。

人数が少ないこともあって、2日間で皆とたくさん話せました。学年に関係なく、貴重な、同じ興味を持つ友達ができ嬉しいです。スタッフの方もフレンドリーで、楽しかったです。お世話になった方々、ありがとうございました。

## 感想

中村 夏子

このセミナーはなんと言っても、初めてのことだらけ。

国際理解について2日間も考えるという、しかも今回会う初めての人たちと。不安にならないわけがない。しかし、セミナーが始まるとあつという間に時間が過ぎていった感じがした。あたえられた課題や疑問に、常に、ない知恵を絞り思考を巡らせ、また参加したみんなとも仲良くなり話すことに夢中になったからだ。

そんなセミナーの中から最も印象に残ったことを1つ挙げてみる。

それは尹<sup>ゆん</sup>慧<sup>へ</sup>瑛<sup>えん</sup>先生の講義。テーマは“目に見えない異文化”。

先生は在日コリアン3世で話の内容を、勝手ながらまとめさせて頂くと…

「日本で生まれ日本で育ったが、自分が日本人だと思ったことは1度もない。  
見た目は同じに見えるけど、自分の中はそれとかなり違うと思っている。  
韓国にいった時、多少の親近感があったが外国という感じがする。  
日本人でもなく、韓国人でもない…  
じゃあ 私は なんなのだろう。」

上のようになる。話の内容が、新鮮かつ考えが及ばない範囲だったため、正直その話から「〇〇を学びました」なんて格好良いことは言えない。聞いている間「へえー…」「ええ!?!」「ほおー…」「そんな風に感じるの!?!考えるの!?!」のくり返しで、話が終わったときには頭の中はぼーっとしていた。

要するに!!!全く想像がつかない話、体験談が大きい塊みたいにとどかんで飛んできて、受け止めるにもその大きさと勢いに倒れてしまって何が起こったのか分からず、放心状態。という感じ。

私の同学年に、中国国籍で普段は日本名が2人と、国籍は分からないが普段は中国名の人が2人いる。

全員見た感じは日本人だが、尹<sup>ゆん</sup>先生の講義をきいて今まで自然に受け入れていた彼らの存在に興味をわき、色々聞いてみたくなった。しかし、もし彼らがそのことを気にしていたり、悩んでいたりするのなら、興味本位で聞くのはやはり失礼に値するのかもしれない。また、3世の人でこんな風に考えることがあるなら、ハーフやクォーターの人もやはり同じように考えるのだろうか、とふと思ひ、今考え中だ。

このように身近な“異文化”に気づけるきっかけが、このセミナーで得たものの1つだ。

二日間貴重な講義や楽しいイベントの機会を設けていただきありがとうございました。

私にとっては、初めて保護者の同伴無しで、電車に乗る、宿泊するということが大冒険。都会では、小学生までもが日常的にしている行動だが、自分にとってはある種の異文化体験だった。

栗田先生の「先住民族」についての講義。私は今まで「伝統」というものは、絶対的に守らなければならないものだと思っていた。しかし、先生の講義の中で、『「伝統」というのはずっと変わらなかったものではなく、ある地点から回顧しているだけにすぎない』というお話があり、今「伝統」と呼ばれているものも時代の変遷に則して、質も姿も磨きをかけられ、次代に受け継がれているものも多いと気づいた。今現在日本にも、「伝統」と呼ばれるものはあるが、それらに日常生活の中で触れる機会は少ない。それは、日本が近代的な生活に重きをおいているからだという考えに至った。

木下さんのワークショップで感じたことは、人が成長する過程で必要なもののほとんどは、私が持っているものだということだ。満たされているあまり、経済的にもっと豊かなら、という考えに陥りがちな自分が恥ずかしくなった。

尹先生のお話を聞いて考えたのは、「自分の居場所」についてだ。先生は「日本人ではないが、自分を〇〇人という定義の中におさめていない」とおっしゃっていた。まあ、普通「何人？」と聞いてくる人もあまりいないだろうが、“Where are you from?”と聞かれたら、今までの私なら何の抵抗もなく、“I'm from Japan.”と答えただろう。今、自問自答してみると、「じゃあ、日本人って何?」「両親が日本人だと思うし、日本で生まれたから日本人かな?」と逡巡する自分がある。尹先生が簡単に答えを出せない問題に自分勝手な安易な定義を正しいと信じていた自分を発見した。

セミナー終了後、ずっと考えていること。「〇〇人」。広辞苑で日本人とひくと、「日本国に国籍を有する人」と出てきた。どこか腑に落ちない感じがする。もっと深いもののような気がしてならない。しかし、その深いものが何であるのか分からずにもどかしい。

このセミナーをきっかけに普段何気なく使っている言葉の意味を考えたり、

アイヌ民族や在日コリアンといった国際面の記事を見るようになったりしたことは成果であると思う。「理解」とまではなかなか行きつかないのかも知れないが、簡単には答えが出せないような事を「考える」ことは続けていきたい。

また、同世代の各地の人たちと考えを出し合ったり、普段は接する機会の少ない大学生や留学生とも交流できて、良い刺激を受け、さらに外大で学びたい!という気持ちが強まった。

山梨県 甲府一高 1年 原 愛実

## 感想

原田 愛弓

私はオープンキャンパスでこのセミナーのことを知りました。今まで他の人と社会的なことについて討論したことがほとんどなかった私にとって、この機会はとても興味深く、応募しました。

このセミナーで特に心に残っているのはグループ討議です。私たちのグループでは、「戦争と暴力」について話し合いました。一人一人の持っているものをそれぞれ受け入れながら意見交換をしていくと、不思議な事に、最後にはグループとしての考えがまとまっていきました。戦争はどうすればなくなるのか、結局結論には達しなかったけれど、お互いに持っている知識を出し合っただけでグループで一致することができ、感動を覚えました。

グループ討議のほかにも、実際に大学の教授の話聞くことによって、これからの社会の課題や自分のしていきたいことなどを明確にすることができました。今回のセミナーに参加させて頂いたことに感謝しています。普段、学校では話題にしない事をテーマにして自分の意見を持っている人と話しているうちに、私自身の考え方が変わってきました。ほかの人の意見を聞いたうえで、今自分の持っている意見を大切にしてこれからも新たな知識を増やし、それぞれの事に対して自分の意見を持っていきたいと思えます。

## 感 想

平石 渚

あっという間でしたが、国際問題に関心のある同世代の子達と一緒に学ぶことができ、充実した二日間でした。

私は国際理解ということに興味を持っていたのはもちろんのこと、自分の考えを言葉にして発するという事が苦手で、コミュニケーション能力を高めるというのもこのセミナーの目的に挙げられていたので、参加しました。やはり発表の場面で堂々と発言する子が多く、驚いたし刺激になりました。

また、在日の人々の事には関心があって本など読んでいたので、特に印象に残っているレクチャーはユン・ヘヨン先生の「多文化共生」です。実際在日の方にお話を伺い、アイヌの話もそうですが、日本に暮らしている人々の皆が皆、自分自身と同じような人である訳ではなく、世界から見れば小さな日本にも多様な人々が存在しているという事を改めて認識し、少し理解できたかなと思います。その後のディスカッションや講評して下さった先生方のお話から、セミナーが終わった後もふとした折りに、何を持って日本人というのか、〇〇人って何だろうと考えるようになりました。

こうして今回のセミナーで得ることができた新しい視点を心に留めて、大学などでまた文化や多文化共生について学ぶことができれば、と思います。

ありがとうございました。

## 感想

藤原 美沙妃

今回学校外で様々な討議や意見交換をするというセミナーは初めてで正直当初は参加して大丈夫なのかという不安だらけでした。しかし、昔から考えていた国際理解(グローバル)を自分の中でさらに深めていきたいと強く思い参加を決意しました。

この決意が16年生きてきた私にとって1番大きな感動と刺激を与えてくれたのかなと思います。

初日に行った栗田教授のレクチャー「文化とコミュニケーション」では、実際に教授自身が調査したパプアニューギニアでの現状をお話してくれました。

伝統というのはその国の文化・知識や言語に値するもの。携帯電話、パソコンと近代化社会だからこそ守っていかなくてはいけないというのが私の率直な気持ちでした。

しかし、近代化は免れない社会で守っていくとどのような問題が発生するのか、そこまで考えたことが無かったので正直複雑な気持ちでした。

またその日の交流会で接した留学生方。その方々の国も訪れたこともなければ人々とも触れあったことがありませんでしたが、その国の習慣、考え方や国柄も私が想像していたことと全く違うということ知れてとても良い勉強になりました。

2日目に行った「多文化共生」。昔からの人間の大きな問題の差別。なくなることを願っていた自分は今まで差別的な気持ちにはならなかったのかと考えさせられるものでした。

そこから発展してグループ討議で参加者の方々と差別と区別の違いや価値観と文化ってどんなこと？と意見を出し合いました。

正直終わりの見えない問題に「難しい」と何度も感じモヤモヤしていました。セミナー前の自分だったらこのモヤモヤに立ち向かわず逃げていましたが、大学生の方のアドバイスでモヤモヤを大切に考えていくことが必要だと学びました。

グループ討議した「文化・価値観と相互理解」という問題はまだ自分のなかで答えは見出せていません。しかし、ただ自分の意見で「こうすればいい。」「ああすればいい。」と理想を語っているだけでは意味がないと思っています。

どんなことが必要なのか、実現にはどのくらいの時間がかかるのか・・・など付きまとう様々な問題も考えることができたのはこのセミナーのおかげだと思っています。

まだまだ私が知らない世界の現状もあり、その中には思わず目を開けたくなくなるほどの厳しいものだってあると思います。第三者の立場であっても、私はそれらのことを知らなければならないと感じました。

何かを考えて伝えたりすることは大変だけれども、このセミナーは私にとってやらなければならないことを見つけさせてくれたと思っています。

今の私にできることは何か。様々な情報を集めながらそれを見つけていくことがこれからの課題だと思っています。

## 「国際理解セミナー」は毎回新鮮！

松島 周子

私は今回の「国際理解セミナー」で三回目のセミナー参加となった。だが今まで参加した第一回から第三回セミナーはどれも違った内容なので、何度来ても新鮮な印象を受ける。

初日のワークショップ「文化とコミュニケーション」では、現在消えつつある言語があると知った。世界には 6000 もの種類のある言語があるが、民族の減少や外国文化の流入、他国の同化政策などにより話されなくなっているものも多いのだ。北海道のアイヌ語もその一つである。

言語の消滅はその民族が長年培ってきた文化や生活の知恵の消滅にも繋がる。それは分かっているけど、少数民族の言語が消滅してしまうのは仕方がないのではないかと私は考えていた。だが他の高校生の「もし日本語が消えるとしたら…」という言葉が聞こえた。

もし日本語が、明日から使用禁止になってしまったら…「仕方がない」より「嫌だ」「悲しい」という気持ちのほうが先に感じられた。第三者の視点では分からなかったが、言語を奪われる当事者に自分を置き換えてみて改めてその気持ちが想像できた。前回のセミナーでは「想像は理解への第一歩である」ということを学んだにも関わらず、それを忘れていた自分がいたことを知り反省する思いだった。

二日目のレクチャー「多文化共生」で、ユン准教授の「韓国人でも日本人でもない自分」という言葉は心に残った。「そういう感覚もあるのかあ。」と感じたのだ。その言葉を聞いて、午後のグループ討議では「アイデンティティと国家」というテーマで討議した。グループ討議ではアイデンティティという言葉の使われる意味が捉えきれなかったため、結論を出すには至らなかった。グループのメンバーと試行錯誤した足跡を発表する形になった。模造紙にまとめると、アイデンティティというものを自分たちの等身大の意見として目に見える。新しい討議の方法を身につけたように感じた。「テーマを問いにする。問いを立てることから問題の追究が始まる。」と教授もおっしゃった。

毎回違うメンバーと話し、討議し、意見交換をするのは刺激的だ。100%の正解も間違いもないからこそ、話し合いで解決を模索できる。長いようで短い二日間で、「道を模索することも問題の追究に繋がる」と知り、楽しくて有意義な時間を過ごせた。

## 感 想

松本 信

今回、セミナーに参加してとても良かったと思います。なぜなら、「日本人とは何か？」ということについて深く考えさせられたからです。もちろんそれ以外の木下さんのワークショップや他の大学の先生の話も面白かったのですが、今までまったく考えたことのない内容でとても深く考えさせられたからです。

最初は眠かったせいもあると思うのですが、どれもあまりパッとせず睡魔と闘っていました。しかし、2日目の尹先生の話（在日の人たちが抱えている問題や悩みや尹先生自身の悩み）を聞いてとても考えさせられました。というのも、今まで、飢餓や貧困などの問題になら考えたことならあるのですが、在日の人たちのアイデンティティは考えたことが無くとても新鮮でした。そして、その後のグループ別討論で「国家とアイデンティティ」というテーマを選びました。そこでは、ある程度納得していたのですが、発表したあとの、先生たちの批評を聞いてその考えがガラリと変わりました。なぜなら、ある先生が「何をもって日本人というのか？」と言ったからです。つまり、どういう人が日本人でどういう人が日本人でないというのは、あいまいなんだということでした。このことについて私はとても考えさせられました、そして、日常から問題を探ることがとても重要だということをしりました。

ということで、今回セミナーに参加して、とても良かったです。

## 高校生のための国際理解セミナーに参加して

宮崎 友花

普段自分の周りには国際理解や、国際交流について興味があるひとがおらず、自分のなかだけで考えていました。そのためその考え方は偏りがちで、なかなか進展せず、真剣に向き合えていませんでした。そんなときに、このようなセミナーに参加できたのは視野が広がるとても大きな経験になりました。

初日、人見知りがちな私は緊張して会場に入ると、とてもにぎやかで驚きました。しかし、お互いに話を聞こう、話そうとする積極的な雰囲気には私はすぐに、中に入ることができました。

二日間とおして、今まで自分が考えたことも思ったこともないことが次々に出てきました。

一つは、栗田先生のお話に出てきた文化、伝統と言語についてで、私は何も考えずに伝統や言語は残すべきだ、もしくは伝統や文化はすべてこれからに必要なものだと考えていました。しかし、すべてがよい伝統や文化なわけではなく、時代の変遷とともに、現地の人々の選択またはある方向付けによって変わっていくものである、ということを知りました。また少し考えると、今私が使っている日本語や習慣やもっている感覚は、これまでの歴史の中でたまたま残ったもので、ほかのたくさんの残らなかったものの上に立っているということに気がつきました。

また二日目のユン先生の講義で、日本人であることを当たり前のように思っているかもしれないけれど、もう一度考えてほしい、という言葉に驚きました。確かに国籍で人と決められないということははっきり認識できました。では何を以って自分は確実に日本人だと認識していたのだろうかと考え、日本人とは、文化とは何だろう、とたくさんの疑問が出てきました。またユン先生は括弧つき日本人が増えていく、と話されましたが日本人といってももうすでに色々なアイヌや琉球からの流れもたくさん入ってきていると思いました。

大きな議題には問いを立て続けて考えていくこと、結論を出して考えの幅を狭めないこと、という言葉は私にとって新鮮でした。このことを常に意識しながら勉強に取り組んでいきたいと思いました。

## 国際理解セミナーに参加して

八十 碧

今回の国際理解セミナーに参加して、私は世界について深く考える良い時間ときっかけを得ました。

普段なら大きな問題でありながらもあまり気にとめていなかった多言語や多文化。このセミナーに参加していなかったら、きっとロシアやいろいろな国で母国語が消えてゆく民族の苦しみや、在日の人々が抱えている不安な問題などを知るのはもう少し後だったり、ひょっとしたら知らずにいたかもしれません。そう考えると、自分は本当に今まで世界に目を向けていなかったのだなぁと思いました。

今回は同世代の世界に興味をもった仲間たちと、それぞれ思ったことを討論し合う時間がたくさん持てたので、自分とは全く違った意見や考えなどを聞くことができました。私の意見も真面目に向かい合って聞いてくれたので、少しは参考になったのかなぁと思うと、とても嬉しくなりました。そのように討論をして情報交換や多くの人の意見を聞くことは本当に大事なことだと思います。

多文化共生や世界に目を向けるということはどこか難しく聞こえるかもしれないけれど、まず自分が一歩踏み出してみないと関われないことです。今回私はこのセミナーに参加するという小さいながらも一歩を踏み出したことにより、多くのさまざまな知識を得て、世界の事情を少し知ることができたと思います。この知識や経験を自分の中だけで消化してしまうのではなく、これから周りの友達にもっと広めていきたいと思っています。

講義や進行をしてくださった先生方、お手伝いや一緒に活動してくださった大学生の先輩方、さまざまな意見を聞かせてくれた参加者のみなさん、本当にありがとうございました。

## 二日間で吸収したもの・・・

柳川 陽介

外語祭で、今回のちらしを見て・・・これだと思い早速申し込んだ11月。

当日会場に入ったらびっくり！男性の参加者は計二人。こんなにまで少ないものなのかと思っただけでしたが、全く気にすることなく終始楽しむ事ができた。一番衝撃的だったのが尹先生の話。今まで在日コリアンとは、名前では聞いた事もなく、どういう事なのかも考えた事もなかった。

だが開始早々、これは今まで自分の中になかったが、どこか調べてみたい内容ではないのか、と生まれて初めて血が騒いだ。母語は日本語で母国語は朝鮮語。

選挙権はなく、自分の源である朝鮮半島へ行くということが、帰るという事ではない。“いったい自分は何なのだろうか”、を幸いにも考えていく事を仕事にされて、今日も考え続けている方を目の前にして話を聞く事で精一杯だった。何度か受けた講義も全て聴いていて頭を使い、普段学校で受ける座学がいかにか頭を使わない受動的なものか、気がつく事が出来た。

一枚の写真から様々な事を想像して、発表するという企画。最初に空港の雰囲気連想させる音楽が流れ、とてもわくわくさせた。空想なのに、その一枚の写真の中に入り込み、その国の方と話をした。小学生の頃にやっていたら、想像力を豊かに培う事が出来たのではないだろうか。また中学校の英語の授業で使えば、これまた豊かに語彙を運用することが出来るだろう、とも感じた。

また、会場に常に貼られていた世界地図。何度も視線に入ってきた。数秒息を抜くときも見ている自分がいた。一枚の地図がこれほどまでに、様々なことを教えてくれるのか。早速、自分の部屋の壁に貼ろう！と思う。

類は友を呼ぶ。特に今回の企画に参加していた高校生。

また運営していただいた東京外国語大学の方々は、一人一人しっかりとした考えをもちながらも、志は一つだと感じた。二日間という短い間であっても共通の課題を考え、自分の意見を述べ、相手の意見を聞き入れる。

またこれらを基にまた新しい課題が見つかる。とても喜ばしい事ではないだろうか。今回得た知識、課題を新たなる人との時間の共有でさらに深める事が出来ると感じている。常に様々な事に目を向け、志という火を絶やすことなく日々成長して行きたい。

## 9 スタッフの感想

### 大学生スタッフ

今回のセミナーは、授業で勉強している「多文化共生」について、高校生とともに考えたいという思いと、自分に何かできる事があればと参加いたしました。

セミナーでは、アイスブレイキングで新しい自分の一面を見つけたり、クリスマスにゴミ箱をあさって(笑)きれいに洗ってエコペットボトルツリーを作ったりと、思い出に残る内容がとても多かったです。

その中で特に心に残ったのが、大学生の僕たちも一緒に参加した二日目のディスカッションとグループ発表の時間です。高校生のみんなが、尹先生のレクチャーを通し、自分たちが今まで意識していなかった「身近な多文化」について知り、敏感に反応していました。『日本人』ってなんだろう？『アイデンティティ』ってなんだろう？僕たちと高校生のぶつかった疑問は、すぐに答えが見つかるようなものではなく、意見が出るたび新たな疑問が生まれました。そんなディスカッションの中で、「すぐに答えが見つからなくても、こうしてみんなで意見を共有し、考えて共に取り組んでいく事が大切だから」とみんなで頑張って意見をまとめていきました。

グループ発表のとき。発表の中で使われていた図の、両方に分かれた「外国人」「日本人」の見方が描かれた絵を見ながら、「ハーフであるお母さんや自分は、一体この図のどのあたりに入るのかなあ」と思いながら、またいろいろ考えていました。

実は、何年も前からすでに多様な文化を持つ人々が暮らしている日本。そのなかで様々な人々が、違い以上に共通点を見つけ出し、共に考え共に暮らし、新しい日本を作っていく。その担い手になるような高校生のみならず、率直で熱い意見交換の時間を持って、自分にとっても多くの学びの場となりました。自分に対しても相手に対しても率直になって、これからもいろんな事に取り組んでいきたいと感じました。

田口 吉孝（朝鮮語専攻1年）

今回「高校生のためのグローバルセミナー」に学生ボランティアのスタッフとして参加して、自分が受講する場合とはまた違った視点で関わるととても良い経験をする事ができました。ワークショップにとっても真剣に取り組む高校生たちを見ていて若いなあ(笑)と羨ましがりつつ、皆しっかりしているなあとても感心させられました。また、彼らと一緒に作業をしたり色々な話をするだけでも僕自身強い刺激を受けると同時に2日間大いに楽しめたので個人的にも嬉しかったです。

前島 健（スペイン語専攻2年）

今回のグローバルセミナーにはスタッフとして2日間に渡り参加させて頂きました。

その中で一番驚いたのは高校生の皆さんが持つ「柔軟さ」です。

初日の朝は皆まだお互い知らない者同士でどこか緊張していたのが、アイスブレイキング、昼食、夕食とツリー作りと時間を追うごとにどんどん打ち溶け合っていくのが手に取るように分かりました。夜、周さんと多磨駅まで皆を見送りに行った時、「また明日ね！」と笑顔で手を電車の中から手を振ってくれたことを今でもはっきりと覚えています。

2日目のディスカッションでは、それまでに体験したワークショップや聞いたレクチャーで感じたこと、自分のこれまでの経験、日頃考えていることなど、全てを吐き出すように本音でぶつかり合って熱く話している様子を側で見ている「負けてられない」と思ったくらいです。

私たちは、多分、大人になればなるほど、人との上手な付き合い方を覚えていく一方で、相手と打ち解けあったり本気で語り合うまでに多くの時間がかかるようになるのではないのでしょうか。「これに対する私の考えはこう」「それは違うと思う」「ここまでなら踏み込んできてもOK」。そんな風いつの間にか相手との間にラインを引いたり、考えを固めてしまっていた自分に気づくことができました。

柔軟であるということは、たくさんのことを吸収でき、相手にソフトに接することができるということ。

今回のセミナーで新たな自分の目標や夢が見つかった人もいれば、相変わらず見つからないままな人もいます。いずれにせよ、柔軟な姿勢さへ持ち続けていれば、まだ見ぬ世界、会ったことのない人、たくさんの素敵なものに出会うチャンスが広がるはず！

・・・と、改めて自分に言い聞かせた、2日間でした。

誰かとの出会いや、ふとした言葉が自分の人生を変えてしまうことがきっとあると思います。このセミナーが、数年後、数十年後に振り返って参加してくれた高校生の皆さんの一つのターニングポイントになっていれば幸せです。

田中彩佳（ロシア語専攻2年）

夏に続いて2回目の参加をさせて頂きました。今回は1日目の夕方からあった交流会の内容を企画しました。

「一日を終えた高校生達と一緒に、何をしようか、何が出来るか」このことを考えるのは、夏とはまた一味違ったわくわく感がありました。

そして実際に考え出した計画は、一緒にクリスマスツリーを作る、というものです。このクリスマスツリー、なんと材料はペットボトルを使いました。近所から何十本ものペットボトルを集めて回っている時は、正直何とも言えない気持ちでした。

当日はツリーの飾りを作るグループとツリーを組み立てるグループに分かれ、和気あいあいとした雰囲気作業を進めることが出来ました。

完成後、ツリー内部にライトを入れ、電気を消してライトをつけた瞬間「わぁ！」という歓声が起こりました。この計画を企画して良かったと、とても嬉しく感じました。

夏、冬と続けて参加をし、多くの貴重な経験をさせて頂くことが出来ました。この経験を糧とし、今後様々なことに生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

柴本智代（カンボジア語専攻3年）

今回のセミナーは高校生のためのグローバルセミナーというタイトルがついていましたが、一番刺激を受けたのは私の方だったかも知れません。私は大学生のスタッフとして参加していたし、相手は高校生だったので最初は上からの目線でみていましたが、実際にみんなと話してみると心の中に潜んでいる情熱を感じる事ができました。高校生の時の自分の事を思い出すと恥ずかしいと思う位でした。

留学生として日本で生活している私は多文化共生とか国際化していく世界について周りの人よりは知っている気になっていましたが、今回のセミナーに参加する事でそれは大きな勘違いだったという事に気づきました。ただ知っている事より、それについて問題意識を持ち実際に動ける行動力を高校生は持っていました。

若い高校生たちに負けないためにももっと世界について興味を持って様々なことに対して知ろうとする姿勢を保っていくべきだなと感じました。

朴 鎬泯（日本語専攻3年）



みんなで作ったペットボトルのクリスマス・ツリー 2009年への願いをこめて… (交流会)

## 多文化コミュニティ教育支援室スタッフ

二日間にわたるグローバルセミナー（第二回）は、世界の諸地域について学ぶ「東京外国語大学」の特性と、多言語・多文化社会が抱える課題に取り組んでいる「多言語・多文化教育研究センター」の特性とがうまく組み合わさった、他にはないプログラムだったと言えます。なかでも、さまざまな関心を率直に表現する高校生の皆さんのキラキラした目がとても印象的でした。たくさんの「なぜ?」「どうして?」がなかなかまとまりきらなくてもどかしい部分もあったかもしれませんが、そこに数多くの出会いを経験してきたスタッフや、いままさに経験を積んでいる大学生たちが正面からぶつかることによって、多くの発見がお互いにあったと思います。それぞれの背景は違っても、共通の言葉をたくさん見いだすことのできた二日間だったのではないのでしょうか。

**外国語学部／多言語・多文化教育研究センター准教授 尹慧瑛**

「高校生のための国際理解セミナー」も、これで3回目になりますが、私が毎回感じるのは、高校生が「真面目に議論する」ことに、とても飢えているのではないかと、ということです。国際問題について、学校では議論したことがない、という人がほとんどです。テレビやインターネットを通じて情報が氾濫し、また、地域の多文化化も進んでいる今、学校に求められているのは、知識注入型の教育ではなく、さまざまな経験、価値観を持つ多くの他者と交わり、「対話」を通じて自分の考えを深め、いろいろな角度からものごとを見る力を養うことではないかと思うのですが。

国際理解セミナーに参加し、自分と異なる何かを持っている人と出会うことの魅力、「対話」の面白さに気づいた皆さんが、勇気をもって、自分の世界をさらに広げていってくださることを願っています。

**国際理解教育専門員 木下理仁**

グローバルセミナーで印象的なのは、初対面にも関わらず参加者同士がどんどん打ち解けていく様子です。受付をしているときに目を合わせようとしない人でも、言葉をかけるときちゃんと答えてくれます。ワークショップが始まれば、どのグループでも頭を付き合わせるように意見交換が始まります。お茶の時間には、あちらこちらで楽しそうに言葉を交わす姿がありました。「人」に対するこのような関心の深さこそ、意味のある会話を生み、新しい社会を創る力となるのだと思います。世界はいろいろな文化を持つ人々がともに暮らしていくようになっていきます。新しい問題がおこり、それに対する答えは誰も知りません。皆さんのともに考え、創り出す力に期待しています。

**学習支援専門員 河北祐子**

このセミナーを通して、何か新しい知識を「知った」「詳しくなった」とかそういうのではなく、「考える」「考え続ける」ことの大切さを皆さんが感じてくれたことが、このセミナーを運営したスタッフとして、とてもうれしいことです。

私も、社会人になってから、仕事に追われ忙しい毎日の中で、考えることをやめたいと思ったこともありました。考えても答えが出ないこともあるし、考えることは決して楽なことではなく、面倒なことでもあります。でも、考える過程で気づくこともあるし、何より考え続けることで、「それで、あなたはどう思うの?」と自分の中のいろんな自分が話し始め、そして自分というものが変わっていく、それが面白いところだと思います。

外語大の「多文化コミュニティ教育支援室」は、日々考えることを「やめさせてくれない」部屋です。

毎日いろんな学生が来ては、何気ない会話の中で、いろんな疑問を残していきます。

私たち大人もまだまだ迷い、考えています。皆さんも迷うことを恐れずに、私たちと一緒にこれからも考えていきましょう。

支援室スタッフ 岡崎智子

一日目のワークショップで写真を見ながら「伝統を守っていてすごい」「尊敬する」と話していた高校生たち。なのに、栗田先生のレクチャーが終わったあとには「伝統を守ることは必ずしもいいこととは言えないのかも…」という声がぱらぱらと聞かれました。普段の高校の授業とは少し違う、大学の先生のレクチャーに、高校生たちの考えが揺さぶられている様子がとても印象的でした。

私自身も大学生生活のなかで、それまでの自分の考え方や知識が覆されたり、あるいは「？」を感じたり、といった経験をしてきました。あまりに衝撃的で落ち込んだことも、今でもまだ「！」が見つかっていないものもあります。ですが、今ふりかえてみるとその「？」たちが現在の自分を作ってくれたのだと感じます。

皆さんも、この二日間で感じた「？」や人との出会いを大切に、「！」に向かって進んでいってください。私も皆さんと出会って、あらたな「？」の発見や、まだ見つからない「！」を探して日々頑張らなければ、と決意を新たにしています。ありがとうございました。

支援室スタッフ 和田更沙

東京外国語大学オープンアカデミー

グローバル

高校生のための国際理解セミナー 報告書

2009年3月31日発行

編集委員 大津 璃紗  
佐藤 早月  
田口 結子  
鶴見 令奈  
原田 愛弓  
藤原美沙妃  
松島 周子  
宮崎 友花  
八十 碧  
柳川 陽介

企 画 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター(多文化コミュニティ教育支援室)  
〒183-8534  
東京都府中市朝日町 3-11-1  
TEL 042-330-5428  
FAX 042-330-5456  
URL [http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer\\_mclsc/ja/](http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer_mclsc/ja/)  
メール t-shien@tufc.ac.jp